

コメント

死者を掘り起こすこと

川村邦光

2001年の夏、私は学生とともに広島市の平和祈念式典（原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）に行った。その前夜、原爆ドームの近くにある広島球場で、広島カープ・阪神タイガース戦のナイターを見た。圧倒的な広島カープ・ファンが球場を陣取っていた。ごうごうたる応援の効き目もあったためか、広島カープが7-0で圧勝した。その頃、両チームは最下位を争っていた。

翌朝、原爆公園におもむいた。献花をする小泉首相の姿を遙か遠くから眺めたような気がする。出席者が整然と椅子に着席して、式典の始まる前、60代くらいの男性が声高に叫んでいるのが聞こえてきた。周囲の人は胡散臭いといった目付きとともに、場違いの奴といった風に眺めていたようだ。男は小泉首相が広島に来る資格があるのかなどと激した口調でしばし叫んでいた。小泉首相は8月15日に靖国神社参拝をすると公言していたのである（実際には、13日に参拝）。

原爆公園の式典会場には、私のきわめて個人的な印象でしかないのだが、熱気はまったくなく、けだるく冷やかな雰囲気漂っていた。それは式典が始まってずっと同じであった。人に応じて個々別々だと思えなくはない。だが、前夜のナイターの雰囲気と比べると、当然かもしれないが、格段の違いであった。何がどのように違っているのか、原爆死者の慰霊また平和祈念といったことに盛り上げられるほど、リアリティが感じられなくなっている、と私は思った。戦後50年以上を過ぎて、原爆死者に対する隔たりが少なから

ず誰にもあったと思えたのだ。昨夜のナイターの方が原爆死者の供養になっているのではないかとも思ったのである。

ことさらに厳肅さを求める式典という形式は、原爆死者や戦死者、また死者一般の供養にふさわしくないのではなからうか。近代日本の西洋化のなから創出された、ただじっとして、事々しい美辞麗句を聞いているだけの公的なセレモニー、もはや誰もが飽き飽きしているのではないかと実感したのである。

私は好きでよく踊るのだが、盆踊りが死者の供養、原爆死者の供養でも似つかわしいと思ったものだ。あらためて思うに、本シンポジウムの「死者と生者の共同性」なるテーマにぴったりなのが、盆踊りではなからうか。信じられているかいないかは別にして、盆踊りでは死者を迎えてもてなす。生者が死者の装いをして、死者と生者がともに踊ることもある。大袈裟かもしれないが、男女の別も、階級の別も、人種・民族の別も問わずに、訪れて踊りの輪に加わる者を拒まずに受け入れていく。いわば“無条件の歓待”、ひとときであれ、無条件の歓待の場が生み出されるのが盆踊りの場ではなからうか。こんなところに、白々しい公的・政治的なセレモニーを超える、原爆死者・戦死者などの死者を想起して記憶し、祝祭的な催しを構想できるかもしれないと思っている。

さて、ジェイムズ・H・フォードさん「20世紀の死者の運命」へのコメント、半ばは以上に述べたことでほぼ尽きている。フォードさんの用いた「運命」の原語は fate である。fate は destiny などとどのように違っているのか、御教示を願ったかった。辞書によると、どちらも宗教的な意味合いをもっているが、fate は不条理性を強調し、不運な宿命、否定的な意味合いが濃厚らしい。destiny は必ずしも悪い運命とは限らないという。

フォードさんの fate は20世紀のホロコーストやヒロシマの「大量死の出現」と結びつけられているようである。ホロコーストでのユダヤ人などの死者、広島・長崎の原爆死者——また膨大な戦死者も加えることができよう—

—は「運命」（発表のなかでは、この言葉はほとんど用いられていないが）において「大量死」をこうむったのだろうか。「運命」と言ってしまうと、加害者の姿が消え失せてしまうような気がする。必然的な帰結だったのではなかったか、その必然の重層した因果を探るのが歴史学の仕事となろうか。

フォードさんは「人間の手によって作り出された大量死の出現」とも述べている。この「人間の手」という言葉も私には不可解である。この「人間」とは誰なのか。人間・人類一般なのだろうか、あるいはヒットラーや米国大統領ルーズベルト、トルーマンなどのことなのだろうか。帝国主義戦争の担い手たち、総力戦の担い手たち——指導者も動員された者、一般「国民」も含めて——に「大量死の出現」の要因を求めなければならないだろう。今でも続行されている、近代の戦争という政治にこそ、大殺戮の要因があるのではなかろうか。

そして、「大量死」という言い方も、この近代の戦争システムと無縁ではない。近代（資本主義）の効率主義的・功利主義的な世界観と戦争システムとは並行して出現して、人間を個別的な存在とはせず、「大量」（mass）としてとらえて、発展／殺戮していった。「大量死」という言い方は、帝国主義戦争・近代資本主義を問うことなく、自明視もしくは隠蔽して、その原因なり責任主体を曖昧にして、人間一般に起因させた物言いではなかろうか。

さらには、「大量死」の「死」とはどのようなものなのかが問われる必要があろう。戦死者においても、単なる「死」ではなく、殺し／殺されるという戦争のコンテクストにおいて起こった死である。「大量死」の「死」は大災害の死、また死一般と位相がまったく異なっている。それは大殺戮・大虐殺といった言葉で表現されなければならないだろう。誰が殺し、誰が殺されたのか、こうした殺し／殺される関係性をたえず見据えていくことが大切だと私は考えている。「大量死」から個々の個別の死者を発掘し想起すること、それがたとえ迂遠な方途であろうとも求められることではなかろうか。シベリア抑留から帰還した石原吉郎が、次のようなことを記していたことが

思い出される。

一人の日本人と一人のルーマニア人、この二つの死体の記憶をもって、私は、入ソ後の最悪の一年を生きのびた。私が生きのびたのは、おそらく偶然によってであったろう。生きるべくして生きのびたと、私は思わない。だが、偶然であればこそ、一個の死体が確認されなければならず、一人の死者の名が記憶されなければならないのである。(中略) 死がありうべからざる、理不尽なことであればこそ、どのような大量の殺戮のなかからでも、一人の例外的な死者を掘り起こさなければならないのである。

(石原吉郎「確認されない死のなかで——強制収容所における一人の死」
【日常への強制】1970年)

石原はこのように記して、「ジェノサイド (大量殺戮)」という言葉を理解できないとも記している。そこには「ひとりひとりの死がない」からである。集団のままひとまとめに葬られるなら、「その死においても自立することなく」、その死の瞬間まで存在していた生が大量という数のなかに埋没されてしまう。「死においてただ数であるとき、それは絶望そのもの」であり、「一個のまぎれがたい符号」である名をもって「峻別されることは祝福である」。人はひとりの個別の死において、特定の人であったことを記憶に留められるのである。

フォードさんは、「生者による死者の記憶それ自体が、神義論になりうる」とし、そして「記憶することができるのは小さな、倫理的な集団」と言う。私もこのフォードさんの言葉にくみしたいと思う。死、もしくは死者を意味付け、想起し記憶していくのは生者また国家や組織のような機関に他ならない。そこでは、この意味付けをめぐって、政治的な抗争も繰り広げられている。また、祈念式典の運営、記念碑の建立、博物館の展示などでも同様である。したがって、どのような記憶をどのようにして生み出していくの

か、広島・長崎の原爆死者であれ、ホロコーストの死者であれ、戦死者であれ、“犠牲の共同体”としてナショナルな政治的語りに収斂している現状があり、それを批判しつ追究していくことが切実なテーマとなると考える。

(かわむら・くにみつ 大阪大学文学研究科教授)